論　説

日本の犬小屋はなぜ三角屋根なのか

澤　村　　明

1．はじめに

本稿では，日本の犬小屋はほとんど三角屋根，すなわち建築用語でいう切妻・妻入に作るのはなぜかについて論じる。雨風を防ぐなら箱であればよく，雨仕舞いを考えても片流れ屋根に作るほうが簡便であり，わざわざ切妻屋根にする必要はない。おそらくプロトタイプのようなものがあり，それが伝播したのではないか，というのが仮説である。

日本国内における犬小屋の先行研究としては，後述するような生類憐み令を巡る研究で言及する史学の論説と，犬小屋で発生する細菌や寄生虫に関する獣医学の論説が存在するが，本稿で取り上げる犬小屋の形態についての研究は見当たらない。

2．日本史上の犬小屋

日本史上，犬小屋が登場するのは，江戸時代，徳川綱吉による生類憐み令に基づいて何カ所かに設置されたのが最初である。よく知られているのは元禄９（1696）年10月に設置された中野犬小屋であるが，史料によると増築後の元禄12（1699）年当時の規模は，犬小屋・餌飼部屋等で290棟・7,250坪であり，形状は以下と記されている（吉田豊［1999］pp.99-100）[1]。

壱棟桁行拾間ニ梁間二間ツヽ
　附　拾間ニ間中柿庇有，壱棟坪数弐拾五ツヽ

したがって，本稿の対象である切妻妻入の犬小屋とは較べようもない大規模なものであり，形状としても異なっている。また「町毎に犬小屋を建て，町役人より食物を人並みに与へ」という記録があるが[2]，もとより形状は伝わっていない。

次に，綱吉没後以降，生類憐み令は廃され，将軍・大名たちが鷹狩りを行なう中で，鷹狩り

---

[1] 原典は東京都立大学付属図書館蔵（当時）の「堀江家文書」。中野犬小屋の経緯や全容については，参照，白橋&大石［1990］。
[2] 参照，国会図書館近代デジタルライブラリー「翁草」校訂９，14コマ（http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/772576）。

用の犬を養畜していたことが知られている[3]。その絵図である「雑司谷御鷹部屋内活物場絵図」（宮内庁書陵部図書寮所蔵）では直径80～100mmの円が描かれ，その中に「犬」と表記されている。この絵図では門扉や鷹の止まり木などの工作物は立面で描かれ，池は「池」と記載されているので，犬の丸囲いは構築したものでなく，おそらく囲っているだけのものであろう。また豊島郡下駒込村に置かれていた「御犬部屋蹟」については「御鷹匠同心組屋敷ノ南ニ続ケリ四百坪」という記録があるが[4]，前後の文脈からみて敷地面積であって，何らかの建築物があったかどうかは不明である。

よって，綱吉による犬小屋という造作物は存在したが，その根拠となった生類憐み令は評判が悪く，綱吉の死と同時に廃止されており（宝永６，1709），その悪評の象徴といってもよい犬小屋の形状が後世に伝わったとは考えにくい。また，鷹狩りに伴う犬の畜養については，犬小屋の利用は確認できない。

３．近世における犬の飼いかた[5]

そもそも近世において犬はどのように飼われていたのだろうか。ペットとして飼われていたのは狆であり，いわゆる屋内飼いであった。その他の犬は，個人で飼育することもあったが，基本的には現在でいう「地域犬」であった。たとえば江戸末に日本に赴任してきたヒュースケンは1857年２月25日の日記に次のように記している（Heusken／青木枝朗訳［1989］p.145）。

犬などは……われわれを見るとひどく騒ぎたて，町じゅうの犬の大合唱になり……われわれの蹟をつけて町はずれまでくると，そこで郊外の犬に吠える権利を譲渡するのである。

この状況は明治になってもしばらくは変わらず，柳田國男は次のように回顧している（柳田國男［1989］p.387）[6]。

> 私などの生まれた村では，村の狗というのが四五匹は常にいたが，狗を飼っている家は一軒もなかった。彼等の食物は不定であり，寝床も自分の癖だけできめていた。

柳田は明治８（1875）年に兵庫県福崎町で生まれているから，1880年前後の福崎町ではヒュースケンのころと変わらなかったようだ。

---

[3] 鷹狩り用に畜養されていた犬は，狩猟犬だけでなく，鷹の餌としても飼われていた。
[4] 参照，国会図書館近代デジタルライブラリー『新編武蔵風土記』豊島郡之11，30コマ（http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/763978）。
[5] 本章と次章は，今川勲［1996］，Skabelund／本橋徹也訳［2009］，谷口研語［2012］，塚本学［2013］仁科邦男［2014］などを参考にしたが，引用などは元の文献から確認している。
[6] ただし初出は柳田國男［1941］『豆の葉と太陽』創元社。

上述のように個人で飼育していた例は，大名・士族だけでなく，庶民でも見られた。天保年間（1830～43）にそのような層を対象に出版されたのであろう，犬の飼育法マニュアルでは，犬小屋という記述はなく，飼育場所については「筵，菰等を敷いて寝させろ，夜中に小便等をさせるなら，納家（ママ）裏口などにさせるようにして外に出すな」としている[7]。これより古い寛政年間の鷹飼育法でも「（犬を）つれ帰りては，台所まはり上り口など，手近き所の土間にむしろにても敷，其上に繋置なり」としているとのことなので（斎藤弘吉［1964］pp.101-8），現代でいう屋内飼いであった。

江戸時代に犬小屋が存在しなかった傍証として，犬小屋の絵図が見当たらないということがある。天保年間以降の三都のさまざまな事象を絵入り辞典のように記述した通称『守貞謾稿』では，巻之三「家宅」でさまざまな家屋の説明と図があるが，犬小屋は描かれていない（喜多川守貞［1996］）。また浮世絵収集で知られる太田記念美術館によれば，犬小屋が描かれた浮世絵も発見されていないとのことである[8]。

４．開国と洋犬の渡来

幕末の開国による西洋文明の到来が，日本の社会文化に大きな変化をもたらしたことに異論はあるまい。それは犬の飼いかたにもいえる。先に引用した柳田國男も上記引用の前に「私は西洋人の文化史を読んでいて，鳥獣の家畜化という段に来るといつでも考える」と記している（柳田國男［1989］p.387）。西洋人がペットとして犬を飼うことを伝え，当初は洋犬飼育が日本の上流階級を中心に流行する。

またそのとき，西洋人が持ち込んだ洋犬に対し日本犬という概念が生じたのであるが，その日本犬が地域犬という存在から，個人の飼い犬と野良犬に分化するのは，狂犬病対策によるものであったとされている。たとえば東京府は明治６（1873）年に発布した「畜犬規則」で「氏名・住所を印した木札と首輪を付けること，狂犬病にかかったら殺すことなど，飼い主の義務を規定した」とされている（今川勲［1996］p.85）。同時に，こうした木札・首輪を付けていない犬は野良犬として捕獲されるようになった。前記のように1980年頃の兵庫県では旧態依然だったようだが，次第に全国的に個人の飼い犬と取り締まられる野良犬とに二分されていったと見て差し支えない。では飼い犬になった明治の日本犬に犬小屋があてがわれるようになったのかというと，そうではないようだ。

洋犬を含め新たに日本国内で見られるようになった西洋文明について，さまざまな絵図が描かれ，紹介書も書かれている。これらの絵図の中に犬小屋が描かれていることは，近代史では既知の事実であるが，その形状についての注目は見当たらない。

たとえば文久２（1862）年制作とされる橋本玉蘭斎による「御開港横浜大絵図　外国人住宅

---

[7] 暁鐘成『犬狗養畜伝』。松尾信一編［1996］pp. 81-126に収録。
[8] 太田記念美術館からの教示。2013年４月17日付メール。

図」の「オランダ七番　コウ子ンホウ住家（ホイス）」の庭には，クラ，ラシャメンの他に「イヌノコヤ」と書かれた切妻妻入で観音開きと思しき絵が描かれている（fig.1，円内）。

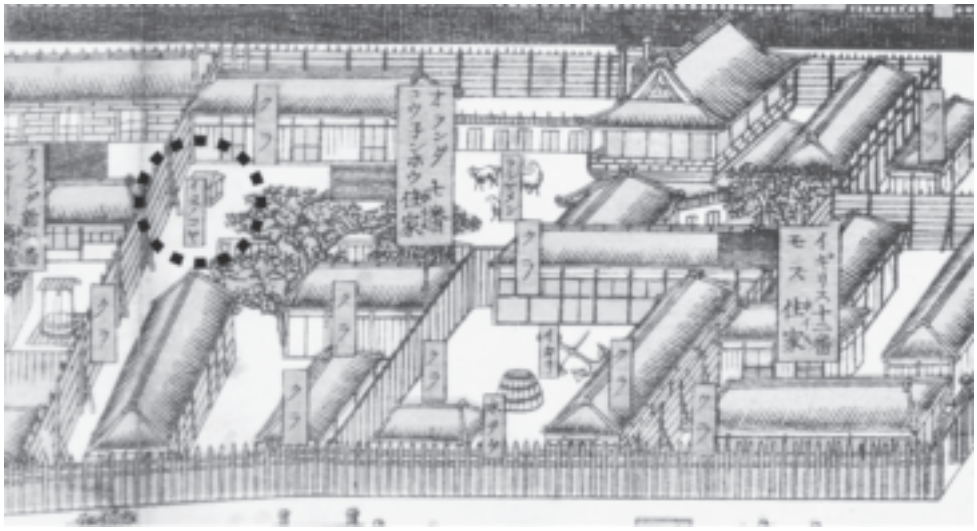

fig. 1　The oldest image of dog house in Japan, 1862

また同じ玉蘭斎による『横浜開港見聞誌』（序文に文久２年とある）には，横浜の「本町１丁目浜吉屋という鰹節乾物屋」の情景として次の記述がある（玉蘭斉貞秀［1979］[9] p.34）。

> ……また自分かまえの内（図）このように作り，高さ三尺ほど，奥行き四尺余，戸を開き見るに黒色光りてくるくると巻きあがり，獅子の黒色かと思わるに，これ，犬なり。その両色よく獅子に似たるが，中に丸くなって有り。この家の主人を見ては箱の内より飛び出し足にまとい背にとびつき，やがて先にたち内に飛びあがり奥の方にかけり行きて，また外に戻るなり。そのありさまいと心もちやさしきなれど，国風とて主人より先へ奥の座敷近までかけ行くは，日本の蝦夷地にて古くかは家の内に入れども，当時はその如くにはあらず。

とあり，木版の文中，上記引用の（図）のところに fig.2 のような切妻に見える五角形の図を彫り出している。また同書にはこの浜吉屋の記載とは別に，fig.3 が掲載されており[10]，これらの絵図から，少なくとも玉蘭斎の目には，この切妻妻入の「犬小屋」が目新しく，ことさらに

[9] 多くは玉蘭斎とするが，本書では玉蘭斉としているため，その表記に従った。
[10] ただし fig.3 の左側に記載されている文章には犬小屋や犬についての言及はない。

描くべき対象と映ったことがわかる。玉蘭斎の出自等は不明であるが，歌川派の絵師であるからそれなりの教養は備えていたであろうし，開国時の横浜の絵図を積極的に描いていることから好奇心も旺盛であったはずである。その彼が犬小屋を描き「イヌノコヤ」と名付けていることからも，綱吉期の犬小屋については伝承されていなかったといえよう。

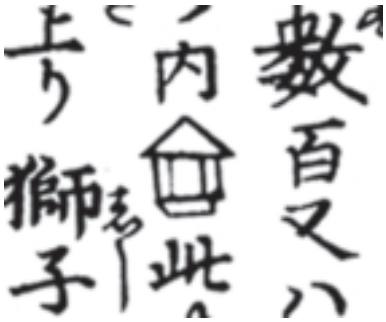

fig. 2　The discription of the dog house in text

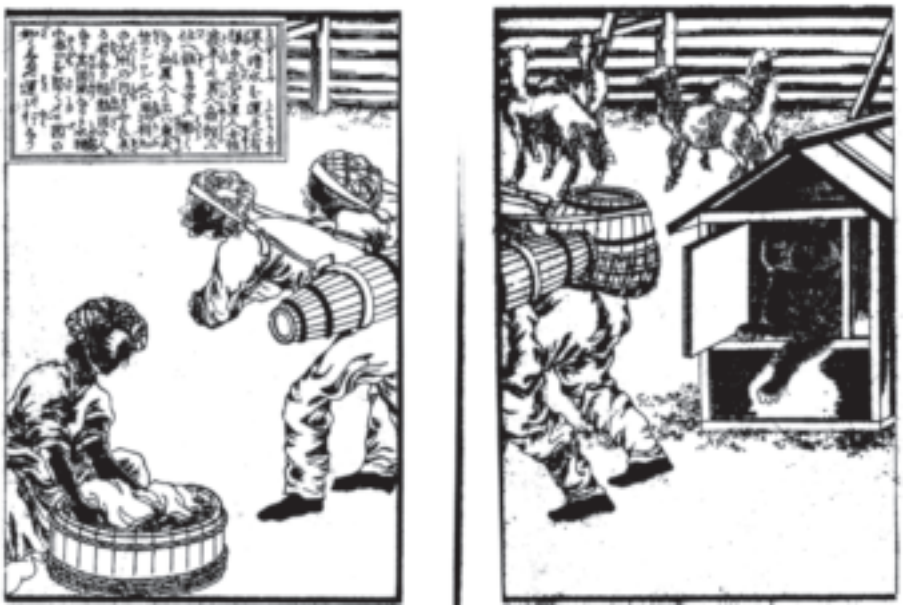

fig. 3　The image of dog house c1862 in Japan

なお鎖国時代にも長崎の出島にはオランダ人が居住していたが，その出島絵図を見るかぎり，放し飼いの洋犬は描かれているが，鳩小屋はあるものの犬小屋は描かれていない。また出島での業務日記には日本の役人から洋犬を求められたり，犬のトレーナーについての質問があったことが記載されているが，犬小屋という記述は見当たらない（van der Velde, P. & Banchofner, R.

［1992］，Blussé, L. & Remmelink, W.［2004］）。

５．結論

これらの史料から導かれる結論としては「日本の犬小屋は幕末開国に伴う洋犬飼育と共に伝わり，その切妻妻入スタイルをプロトタイプとして全国に広まったのではないか」ということである。前章を補完する傍証としては，明治天皇による猟犬飼育の記事がある。すなわち明治26（1893）年11月に在ロシア外交官に猟犬購入を命じ，それが到着したので代々木御料地で飼育させたという記録があり（宮内庁編［1973］），また明治33～34（1900～01）年の記録として「代々木御料地洋犬舎外構朝鮮矢来」の破損等を修繕している（宮内庁公文書館所蔵「代々木御料地内御茶屋新設其他工事録２明治33～34年」）。図面等が残されていないため形状は不明であるが，修繕工事の予算が550円，決算が547円24銭であり，当時（明治30年）と2014年現在の金価格比3,240倍で計算すると約178万円であり，さほど小さなものとは考えにくい。

むしろ，「洋犬舎」と名付けられているように，洋犬飼育に必要な施設と考えられていたことが，前章での発見と関連づけられる。

６．残された課題

では西欧ではいつごろから切妻妻入の犬小屋が作られるようになったのか，ということが次の課題であるが，これは海外の犬飼育史に関する文献が見つかっておらず，今後の課題である。ただし，アメリカ国会図書館の画像ライブラリに収録された「犬小屋」画像としては，1864年頃の風刺画「The old bull dog on the right track」が最古のものである（fig.4）。また，ホワイトハウス史 Web には歴代大統領についての記事があるが，ハリソン大統領（1889-1893）のところには彼の愛犬ダッシュが犬小屋につながれている画像，fig.5がある。

fig. 4　The oldest image of dog house in LOC, c1864

fig. 5　President Harrison's dog house

したがって，日本最古の犬小屋絵図が描かれた1862年と同時期のアメリカには切妻妻入の犬小屋が存在していた。アメリカの犬小屋のイメージとして有名なスヌーピーと日本の犬小屋とは，共通の先祖を持っていたといえるのである。

なお，開港当時の犬小屋の画像である fig.1～3 を見ると，正面出入り口に腰壁が描かれてい

るが，それらがどのように失われたのかはもとより不明である。あるいは玉蘭斎貞秀がこのような形状と決めて全て同様に描いた可能性もあろうが，1979年の復刻本の解題では玉蘭斎について「現地踏査に基づく写実的画風で，当時の日本人には未知の対象物に正確で鋭い観察をくわえ」「彼のほか横浜絵師としては……などがいるが，質量ともに貞秀が群をぬいている」としている（玉蘭斉貞秀［1979］）。腰壁があったか，床を上げてあるなどを表現したのではないだろうか。

参考文献

今川勲［1996］『犬の現代史』現代書館。

喜田川守貞（宇佐美英機校訂）［1996］『近世風俗志（守貞謾稿）一』岩波文庫。

玉蘭斉貞秀［1979］『横浜開港見聞誌』名著刊行会。

宮内庁編［1973］『明治天皇紀　第８』吉川弘文館。

斎藤弘吉［1964］『日本の犬と狼』雪華社。

白橋聖子 大石学［1990］「生類憐み令と中野犬小屋」『東京学芸大学近世史研究』，第4号，p.1，pp.91 103。

Skabelund, A. H.／本橋哲也訳［2009］『犬の帝国』岩波書店。

谷口研語［2012］『犬の日本史』吉川弘文館。

塚本学［2013］『生類をめぐる政治』講談社学術文庫。

仁科邦男［2014］『犬たちの明治維新』草思社。

van der Velde, P. & Bachofner, R.［1992］*The Deshima Diaries Marginaria 1700-1740*, The Japan-Netherlands Institute.

Heusken, H. C. J.／青木枝朗訳［1989］『ヒュースケン日本日記：1855-1861』岩波文庫。

Blussé, L. & Remmelink, W.［2004］*The Deshima Diaries Marginaria 1740-1800*, The Ja-pan-Netherlands Institute.

松尾信一編［1996］『日本農書全集60　畜産・獣医』農山漁村文化協会。

柳田國男［1989］『柳田國男全集２』ちくま文庫。

吉田豊［1999］『チャレンジ江戸の古文書　犬鷹大切物語』柏書房。

図版出典

fig. 1　横浜都市発展記念館の好意による。

fig. 2　玉蘭斉貞秀［1979］p. 34。

fig. 3　玉蘭斉貞秀［1979］p. 56-57。

fig. 4　http://www.loc.gov/pictures/item/2003674579/，2015年３月８日閲覧。

fig. 5
http://www.whitehousehistory.org/photographs/white-house-administrations/benjamin-harrison-white-house.html，2015年３月３日閲覧。

WHY DOG HOUSE IN JAPAN HAS TRIANGULAR ROOF ?

Akira SAWAMURA

In Japan, most dog houses have trianglar roof, e.g. gable-roofs and entrance in the gable end. This phenomenon has no necessity, it needs only box-type, or shed-roof against the rain. But there are no thesis to research the reason why.

The first ‘dog house’ in the history of Japan was appeared in 1696, when Shogun Tsunayoshi ordered to build the dog houses as the shelter for dogs, as a part of policies of the Shorui-Awaremi-no-rei (ordinances of animal protection). But its shape and size was 18m long and 3.6m wide, and there were 290 houses for dogs and sheds for feeding. This was not the prototype of contemporary dog house argued in this thesis. In Edo period (eraly modern era in Japan), Japanese people keep Chin (Japanese spaniels) within doors, and others were stray dogs. So, there were no dog houses in Japan before the modern generation begun in 1867 as Meiji period.

Japan ended its national isolation at the end of the Edo period, then many western styles were carried in Japan. One of them is the western way to keep dogs was also delivered to Japan. The Painters drew many pictures of Western things becaouse they were very fresh and novel for Japanese. Although some historians have been reported that the dog houses were portrayed in some of those pictures, they hae never referred that shape.

Fig. 1 is the first picture of the dog house in Japan. This was in the Dutch residence in Yokohama, and pictured in 1862. Fig .2 is the discription of dog house in other storehouse owned by Japanese in Yokohama, we can see the pentagon-like dog house in the text of wood-blocked printing. Fig. 3 is in the other pages of same book as fig. 2.

The conclusion of this thesis is slightly as a hypothesis, but the dog house with gable-roof and entrance in the gable end was carried in Meiji period from western world. Then, in western world, how the dog house was made up with this shape? It would be a farther subject, but I found a few historical paterials in United States, fig. 4 is the political caricature in around 1864 in the Library of Congress, and fig. 5 is the dog house for Dash, the pet of President Harrison.

The dog house in Japan deems to have a common ancester with that in the famous comic of Snoopy.